

前回のニュースをお届けしてから、4ヵ月余り。深秋の候となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。今号では、7月以降の史料ネットの取り組みと、今後の予定について報告します。

炎天下も続けられた史料救済活動

右表は、7月以降の史料救済活動（救出活動 巡回調査・救出史料の整理）をまとめたもの（括弧は参加人数）。4ヵ月で合計48件の活動を実施、のべ238名のボランティアが参加。

（史料救出活動）被災家屋の撤去は、当初の見込みよりも大幅に遅れ、現在も進行中。これに伴い、6月末を終了のメドとしていた救出活動（史料レスキュー）も延長、10月までに8回実施しました。11月以降は、現在情報を把握しているケースの救出が中心となる予定。

	救出活動	巡回調査	史料整理
7月	4 (18)	7 (77)	4 (12)
8月	0 (0)	5 (36)	3 (15)
9月	3 (9)	5 (31)	0 (0)
10月	1 (5)	4 (24)	2 (11)

（巡回調査活動）救出史料の多くは、ネットのメンバーが被災地を訪問する巡回調査（史料パトロール）によって、存在が判ったもの。この調査は史料の被災状態の把握や救出対象の発見を目的に、これまで伊丹（3～4月）・神戸（4～10月）・宝塚（6～9月）・明石（7月）・川西（9～10月）で実施しました。史料の破棄や焼却、古道具屋の買漁りの情報が、被災各地から入ってきたのがきっかけで、独自の調査が無理な自治体に協力する形で開始。まず史料所蔵者や旧家等のリスト、住宅地図などを作成してから、学生・院生・郷土史家を中心とする調査ボランティアが家々を訪問し、家人と対話の中で史料情報を聞き出します。7・8・9月の炎天下も大勢のメンバーが参加、訪問先で様々な反応にあい、錯誤を繰り返しながらも粘り強く調査を続け新史料の発見や埋もれていた地域史の発掘など、大きな成果を挙げました。この巡回調査は、10月で一応終了し、以後は詳しい聞き取りや再訪問が必要な箇所に絞りこんだ調査に移る予定。

（救出史料の整理）救出の結果、自治体や付近の大学等に搬入された史料は、現在段ボールで1000箱近く。緊急避難的に詰め込んだものも多く、保存・保管のための清掃・分類・仮目録作成等の作業が急がれました。そこでネットのメンバーの有志が、自治体等へのボランティアとして史料整理を実施。また独自に燻蒸できない史料は、和歌山県立文書館が引き受け、搬送は柳中村多喜彌商店が無償協力してくれました。整理作業は、来年3月頃まで継続の予定。

*なお2月からの累計では、活動は99件、参加者のべ704名です。

市民と共に歩む歴史学を目指して：連続講座スタート

上述のような成果を挙げた巡回調査では、近世～近現代の史料が多数滅失した事実も判明。なかには震災以前、代替りや家の建替えで無くなったケースも少なくありませんでした。歴史・文化遺産の保全・活用・危機管理に、研究者と市民・行政の認識共有が不可欠であることが痛感される一方、地域史・災害史等に対する関心が、震災を機に市民の中で高まっていることも判ってきました。そこで史料ネットの母体である阪神大震災対策歴史学会連絡会では、研究成果を市民と共に未来に活かすことを目指す「震災復興：歴史と文化を考える市民講座」を企画。地元自治体や新聞社等の後援を受け、第1回を9月15日に神戸市で開催しました。小山仁示・小路田泰直・保立道久の3氏の講演に、地元で文化財パトロールをしている真野修氏のコメント。市民の発言が続いた質疑も時間も含めて真摯な空気が会場を充たし、講師からも「こんな雰囲気講演会は初めてだ」という感想が寄せられました。この企画は2ヵ月に1回のペースで内容を変えながら、芦屋・西宮・宝塚・伊丹・尼崎と被災地を巡回していく予定です。

中心部では撤去作業も進み、空き地が目立ってきましたが、裏手や奥へ入ると解体を待つ建物がまだ残っています。7月以降、神戸市では史料の救出活動は5件、巡回調査は9回（うち明石1回）実施しました。巡回調査は6月まで行っていた灘区・東灘区など市域東部に加え、中央・兵庫・長田・須磨区など、中部から西部に調査範囲を拡大、さらに明石市立文化博物館と協力して明石市東部にも足をのびました。今回調査した地域は阪神大水害や空襲の被災地ですが、所々にこうした被害を免れて旧家や古い町並みが残っていました。調査の結果、そういう場所が震災で集中的に被害を受けたことが判りました。震災の中心地だけあって訪問した際には、すでに解体済みで、史料を捨てたり燃やしたりした所もありましたが、旧家の経営史料や地域の共有文書などは、大事に保管されました。解体予定の蔵や家屋がある家のなかには、解体の時には連絡をもらう約束をした所が数件ありました。長田区では兵庫運河創設者宅の倒壊家屋の縁下からは、創設期の株券が大量に発見されました。運河経営に関する第一級の史料であり、所蔵者に保全を頼んで10日後にレスキューに向かいましたが、解体業者の手違いでほとんどが瓦礫と共に処理されたあとで、非常に悔しい思いをしました（その後、所蔵者から運河関係の史料が別な所から出てきたとの連絡があり、神戸市文書館に移管する予定）他に救出では7月に、6月の巡回調査の際に訪問した東灘区御影の旧家から、近世の四国巡礼関係の史料、同区岡本の旧家から近世書籍や明治神宮遙拝所建築計画史料を保全・回収。さらに9月には巡回調査で立ち寄った東灘区森北の旧家から連絡で向かったメンバーが、近世文書と土地区画事業等の大量の近現代史料を発見しました（新聞記事参照）。

10月までで市内の旧村・旧市街域をひと通りまわったことになり、神戸市域の大規模な巡回調査はひとまず終了し、以後は連絡待ちのお宅の再訪問やレスキューがちょうしんとなります。また今回の調査で旧兵庫津地区や駒ヶ林などの古くからの港町や漁村があった所では、未公開史料や中世後期まで遡るような古い地域秩序や家格意識が残っていることが確認され、総合調査の必要が痛感されます。

宝塚・川西での被災史料巡回調査（「パトロール」）活動とその成果

各地で続々と史料救出の成果が上がるなか、6月からは宝塚、9月からは川西でも被災歴史資料の巡回調査（「パトロール」）活動が実施されました。

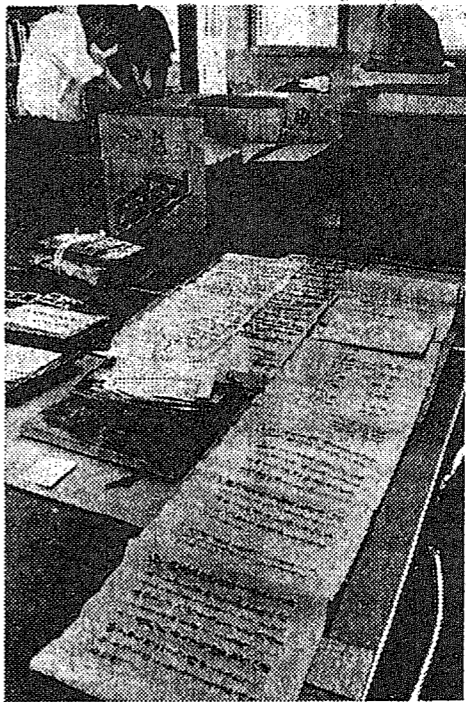
まず宝塚市では、6月9日の山本・平井地区を皮切りに、9月4日までに10回にわたる調査が行われ、宝塚市史資料室の協力のもと、延べ82人の参加を得て、対象地域の旧村落をほぼ悉皆的に巡回することができました。訪問したお宅は500軒以上に上り、被災史料の救出（8件）のほか、市史関係史料の安否確認（多数）や未知の史料の発見（これも多数）などの成果が上がっています。市史資料室に搬入した史料だけでも文書・書籍類約60箱、ふすま（裏張古文書）60点以上、民具類約20点という膨大な量に及び、同室では保管場所の確保や史料整理作業に追われています。救出した史料には、例えば坂上家文書（山本）に山本青年会の大正期の活動記録が含まれているなど、貴重なものが少なくありません。また未知の史料の発見という点では和田家文書（米谷）の発見が最大の成果と言えましょう（別掲の新聞記事参照）。和田家文書については、7月23日から9月8日までにかけて6回、延べ33人の参加によって現状記録を主目的とした仮整理作業が行われ、その概略を把握することができました。市史資料室でも今後本格的な調査と整理を行っていく予定です。

多数の史料の救出・発見という成果の一方で、多数の史料が震災によって廃棄された事実も明らかになりました。訪問先で「もう少し早く来てくれたらなあ」との言葉に接する機会も少なくありませんでした。

次に、川西市では、7月から社会教育課と交渉・相談の上、宝塚の終了を待って9月8日から調査を開始し、11月3日まで4回の調査を実施しました。同市では、以前あった市史編集室がすでになく、市史編纂当時に調査された史料の地震後の安否確認も行われていない状況でした。そこで川西の調査ではそうした市史関係史料所蔵者の訪問を重点に巡回を行いました。40軒近い所蔵者を訪問しましたが、地震被害が比較的軽かったせいか、震災による史料廃棄の例は皆無でしたが、地震以前の代替りや家の建て替えなどのために所在不明となっているケースが散見されました。その他にも、宝塚同様、未知の史料の所在（や廃棄）が多数確認されています。そのうち、小戸地区のあるお宅で所蔵が確認された幕末～明治初期に活躍したある儒学者の史料については、仮整理を実施する予定になっています（第1回=11月12日）。

以上のように、宝塚・川西の巡回調査では多くの成果が上がるとともに、地域における史料保存のあり方について多くの問題や課題が浮き彫りにされました。今後は、調査過程で発見された所蔵者の再調査や、救出・発見史料の整理作業などに取り組むとともに、各地で市民と一緒に地域の歴史や史料保存の問題などについて考え、話し合う場を色々な形で用意していくことも重要です。その一例として、宝塚では今回発見された和田家文書を素材に、研究会や「古文書を読む会」を組織しようという提案もなされています。被災史料の救出活動から得た教訓を歴史学の新たな発展へとつなげていく一つの方向性として注目されるものです。今後とも、こうした各方面での活動に対して皆さんの参加・支援をお願いします。

東灘の旧家で「歴史資料保全情報ネットワーク」



神戸市内の旧家から見つかった昭和初期の史料—神戸市灘区の神戸大学で

被災地で歴史資料の保全、調査などの活動をしている「歴史資料保全情報ネットワーク」(代表・奥村弘)神戸大学助教授)はこのほど、震災で全壊した神戸市東灘区の旧家で、一八三〇年ごろから昭和初期、太平洋戦争直後までの文書約三千点を見つけた。文書の中には、昭和初期の土地区画整理事業に関する地図や話し合いの記録などが含まれ、同ネットワークは「当時の地域社会を知る珍しい史料」と話している。

区画整理地図や議事録

震災で母屋は全壊、史料を保管していた土蔵も半壊したことから、取り壊しが決まっていた。しかし、同ネットワークが六月、土蔵の中には貴重な史料もあるのではと藤本さん方を訪ね、今回の発見になった。「貴重な史料」とは聞いていたが、蔵の取り壊しが決

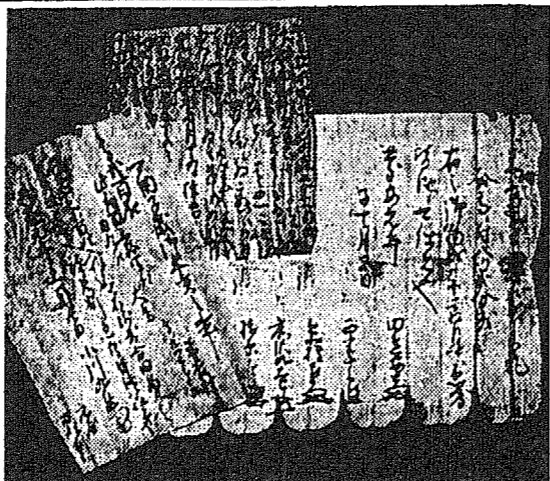
まったことで史料は捨てようと思っていた」と藤本さん。この史料は、故千代太郎さんが村会議員時代から、合併後に民生委員をしてきたころまでの記録。同村が昭和初期から取り組んだ区画整理に関して、本山村森北部土地区画整理組合の組合議の議事録や、計画地図、村会議の参考史料などが見つかった。

また、他には一八三〇年ごろに書かれたと思われる芦屋川の水利権を契約した文書や、太平洋戦争中に利用されたと思われる「大日本国防婦人会」と書かれたたすきなども含まれている。一つの村の記録として、これだけまとまって残っているのは珍しく、昭和初期から戦中、戦後にかけての村社会を研究する上で貴重な史料だといえる。

調査に当たった奥村助教授は「明治以降の史料は、価値が低く見られ、震災の混乱で捨てられるケースが多いのでは。古い史料をお持ちの方はぜひ教えて欲しい」と話している。歴史資料保全情報ネットワーク(078-881-1212内4070)。

江戸前期の年貢免状

宝塚被災の旧家から救出



宝塚市の旧家から見つかった年貢免状

宝塚市の旧家から二十日、市内で最も古い江戸時代前半の年貢の請求書一年貢免状などが見つかった。震災のがれきりとともに発見される文化財の救出活動をしている歴史資料保全ネットワークが発見したもので、同ネットワークは「免状はほぼ毎年さつていて、年貢高の移り変わりから、当時の社会情勢を知る貴重な資料」としている。

市内で最も古い民家で、庄屋だった会社員和田正宣さん(六五)方(同市米谷一)。

和田さんの家族が、震災で半壊した蔵を掃除中に長持ちを見つけ、偶然、訪れたメンバーが古文書二千七百五十三点を発見した。年貢免状は、一六四八年(慶安元年)から幕末までの間のうち百三十五年分。慶安元年の免状には「生産高二百石に対し百三十四石、六ツ七分取」などと書かれており、当時六七〇の年貢が収められていた。

このほか、領主からの触れ書き、隣村の宿場町・小浜村や山の境界線などで中

歴史資料保全ネットワーク

山寺村と争っていた訴状の控えなど、年代のわかるもので一六三三年から一八八九年までの古文書があった。

同ネットワークのメンバーで、神戸深江生活文化史料館副館長の大國正美さんは「江戸後期には、年貢がほぼ固定していたが、前期は変動が激しかった。領主の専横や農家の反発など、今後、他の資料と合わせて内容を詳しく調査したい」と話している。

歴史、文化から復興を考える

阪神大震災対策歴史学会 連絡会などが連続講演会

被災地を巡回して開く連野から、被災地の歴史や連続講演会「震災復興・歴史」今後の展望について語ると文化を考える市民講座」

掛けていく。第二回は十二月三日、芦屋で開催予定。まずは小山教授が「市民とともに掘り起こす現代史」と題し、大阪、尼崎、神戸、西宮とそれぞれ異なる大阪湾岸都市の性格を、戦後の開発の歴史に照らし



歴史や文化とのかかわりから復興を考へる講演会神戸市中央区、県教育会館

本都市計画はマスタープランや財源保障などの面でせい弱であり、官僚主導で住民の民主的コントロールを組み合わせるべきことなどを指摘した。しかし神戸

最後は保立教授が「福原京とその時代」として、軍や貿易、外交の要として重視されてきた神戸の歴史を古文書に基づき検証。また福原遷都に触れた「もと」よりこの所におけるものは地をうしなひてくれ」とい

被災地を巡回して開く連野から、被災地の歴史や連続講演会「震災復興・歴史」今後の展望について語ると文化を考える市民講座」

日本史研究会、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会、京都府歴史部会の四学会が構成する「阪神大震災対策歴史学会連絡会」と、神

策歴史学会が主催。歴史や文化の遺産を生かした復興のける仕事が必要だ。阪神大

代といふそれぞれの専門分と市民、行政の連携を呼び

集、保全に努めねばならぬ」と語った。

続小路田助教授のテーマ「都市美と災害」。日に裏付けられた社会的活力

は、全国に先駆けて市勢調査を行った自治体であり、労働組合や消費組合の発達

史料の保存めぐり課題

阪神大震災の被災地では、ボランティアによる歴史資料の救出・保存活動が今も続いている。これによって数多くの史料が散逸を免れた。一方で、歴史学と史料保存行政が抱える課題、人々の歴史意識の希薄さも改めて浮かび上がった。それ自体が歴史的事件である震災の体験を後世にどう伝えるかも課題だ。史料保存の観点から震災の教訓を探った。

(上丸 洋一)



震災後に発見された江戸時代の文書を整理する史料ネットの人たち＝兵庫県宝塚市で

史料を救出するため、歴史資料保全情報ネットワーク(略称史料ネット)が活動を始めたのは二月中旬、関西に拠点を置く大阪歴史学会、日本史研究会、大阪歴史学字協議会、京都府史料研究会などの学会が集まって開設した。

当初は倒壊した家屋から史料を救出し出す作業が中心だったが、その後、三月末から被災地の「パトロール活動」が始まった。被災地の家や神社、寺に訪ね、史料の所在を確認し、博物館や自治体史担当部に協力する形で、これまでに数ボール箱約

七百個分の史料を各自治体などに運び込んだ。

兵庫県丹波市の旧家から発見された江戸時代の地域医書に関する古文書や、鹿嶋市前に尼崎市で救出された戦後の公害反対運動に関する資料など、いずれも貴重な史料だ。

京阪神の大学院生、学生ら約百人がボランティアで参加。パトロールは週一回のペースで十月まで続けられる。

弱い行政の取り組み

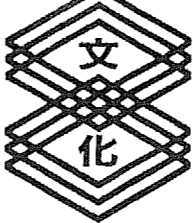
震災はまた史料保存行政の弱さを改めて浮かび上がらせた。被災地のうち、伊丹、豊後、尼崎などは、市史の編さんにあたって古文書などの所在調査を実施しており、震災後はこれを基に災害を調べた。一方、神戸市には全市を網羅する史料リストがなかった。職員不足などでその後も民間史料の保全には手が回っていない。

問題は被災地だけでなく、自治体史の作成は全国的に遅滞している。しかし大半の自治体は市町村史が出来上がった段階で担当部署を解散させたり、組織は残存させても極めて少ない職員と予算しか充てていない。

「歴史と文化を大切に」という意識は掲げても、地域史料の継続的な調査・保全、住民へのレク

「歴史に学ぶ」という言葉に向かっ地獄をくぐる(奥村助教)活動をしていく自治体は少ない。多くの市民が震災の経験を通じて、歴史を学ぶ機会を得た。これは緊急時の対応は困難だが、尼崎市立地域歴史資料館の辻川政氏「歴史学などの専門家と自治体、地域住民の連携を日常的に積み上げておかないと、災害に際して対応することがよくわかった」と強調する。

一方、今回の震災をどう歴史に残すかという課題も対応が急がれている。



学者と市民に「すれ」

こうした活動を通じて、震災以前にすでに処分されていた史料が少なくないこともわかった。史料ネットの代表幹事、奥村弘神戸大助教は「学者と市民の歴史意識

のギャップに改めてショックを受けた」と言う。何を歴史・文化遺産と見るか、その価値観が両者の間で共有されていないことが震災でよく示されたからだ。

見平凡な資料が、地域史を語る重要な史料となるという認識は一般には希薄だ。現実をどう史料の多くが震災後に失われたと見られていた。

そうした「ギャップ」の一因は歴史学が地域から遊離していることにあるのではないかと、その見方がある。

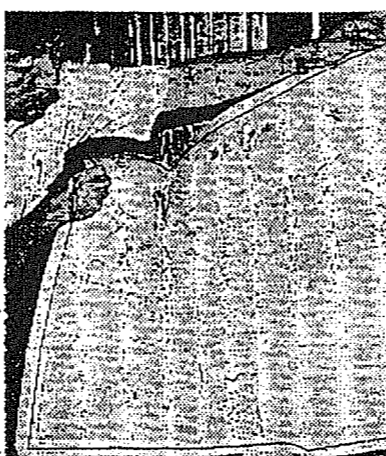
「歴史研究者はこれまで、史料を地域の人々から切り離して見てきた。その結果、人々は歴史を自分とは関係ないものとして見てきた」と史料ネットの一角、神戸市立生活文化史料館の企画部長、副館長は指摘する。

「歴史と文化を大切に」という意識は掲げても、地域史料の継続的な調査・保全、住民へのレク

「歴史に学ぶ」という言葉に向かっ地獄をくぐる(奥村助教)活動をしていく自治体は少ない。多くの市民が震災の経験を通じて、歴史を学ぶ機会を得た。これは緊急時の対応は困難だが、尼崎市立地域歴史資料館の辻川政氏「歴史学などの専門家と自治体、地域住民の連携を日常的に積み上げておかないと、災害に際して対応することがよくわかった」と強調する。

一方、今回の震災をどう歴史に残すかという課題も対応が急がれている。

阪神大震災で倒壊した建物から古文書などを救出して取り出した「歴史資料保全情報ネットワーク」(略称史料ネット)代表・奥村弘神戸大助教が活動を始め、八月、メンバーの研究者の手で被災地を回り、江戸時代から近・現代に至るまで貴重な史料を回収した。その数は阪神一帯約七百個分になり、神戸・阪神地域の都市部の過半数の歴史学系を有する自治体も参加していた。こうした活動の意義は、今後の震災も多くなり、研究者たちは史料を整理・公開して多くの歴史の断片を地元自治体で求めたい。



本史研究会、大阪歴史学協議会、京都府史料研究会などが共同で二月中旬に設立した。研究者を含むボランティアが被災地で史料の所在を尋ね、パトロール活動を三十回以上実施。市民からの「手を見てほしい」という声も多く、史料ネットは、大阪歴史学協会、日

保管場所確保が課題

史料ネットは「我々の手で救出されたのは一割に満たない。地域の歴史的・文化的資料を保全し、市民に公開する文書館などの施設確保も今後の課題だ」と言う。

こうした史料ネットは、こうした現状を踏まえて取り組む。被災地を巡回する「震災復興・歴史と文化を考える市民講座」を企画。九月十五日、神戸市の兵庫東部教育センターで一回の講座を開き、小山(京都大学助教)現代史)、小路田(京都大学助教)現代史)、保立(久野京大教授)中世史)の三人が講師を務めた。

小山教授は「市民と史料の接点(現代史)をテーマにして、我々たちの時代に研究が進まないという状況、史料を収集し、整理を始めるべきか、歴史学系が史料を整理する計画で、次回(九月二十一日)は神戸市で開く」と話した。

救出活動は九月三日の夜から始まり、その後、各自治体で史料の救出活動が続いてきた。



古文書の1000の救出、市民啓もつに講座

市民啓もつに講座

救出し、博物館などに運び込んだ。救出した史料は、近世(江戸時代)・近代(明治維新～大正維新)の文書、書翰、帳簿、日記、別紙、伊丹市の山家家の蔵から救出した医学書やカルテは江戸時代以降の医療の歴史を伝えている。神戸市東灘区の藤本家にあつた文書からは、一九〇〇年に本山村が神戸市に編入される前後の地域の歴史が分かった。

また「尼崎公家屋敷・家族の会」の事務所から救出したのは、公家屋敷の記録や訴訟関係資料など、尼崎公家屋敷の歴史を伝える回廊の

会風は高層者が多く作業に困っていたため、地元で尼崎市立地域研究史料館と史料ネットが協力して救出した。同館は「約五百枚の資料の中には、日本公家屋敷の歴史を伝える史料も含まれている。こうした史料は、被災地全体の歴史を伝える上で重要な役割を果たしている。同館の辻川政氏(歴史学)は、震災以降の歴史や市民生活の記録が大事だと語られたのは、震災の歴史を伝える上で重要な役割を果たしている。同館の辻川政氏(歴史学)は、震災以降の歴史や市民生活の記録が大事だと語られたのは、震災の歴史を伝える上で重要な役割を果たしている。同館の辻川政氏(歴史学)は、震災以降の歴史や市民生活の記録が大事だと語られたのは、震災の歴史を伝える上で重要な役割を果たしている。



歴史資料保全情報ネット

救出し、博物館などに運び込んだ。救出した史料は、近世(江戸時代)・近代(明治維新～大正維新)の文書、書翰、帳簿、日記、別紙、伊丹市の山家家の蔵から救出した医学書やカルテは江戸時代以降の医療の歴史を伝えている。神戸市東灘区の藤本家にあつた文書からは、一九〇〇年に本山村が神戸市に編入される前後の地域の歴史が分かった。

また「尼崎公家屋敷・家族の会」の事務所から救出したのは、公家屋敷の記録や訴訟関係資料など、尼崎公家屋敷の歴史を伝える回廊の

震災に関する記録保存をめぐる状況

震災からの復興が本格的な軌道に乗りつつある今、新たな課題として、震災に関する記録保存の問題がクローズ・アップされてきています。

災害史上に残る規模となった今回の震災では、その被害や災害救助・生活復興などの実情を記録し、分析して共有財産とし今後の災害対策や街づくりに活かしていくことが、全国的あるいは全世界的に求められています。その第一歩となるのが、震災に関する文書・資料・刊行物・写真・ビデオなど、多種多様な記録を網羅的に保存し、行政・研究機関・市民の利用に供していくことでしょう。

震災記録を残すライブラリアン・ネットワークの活動

この課題に対して、先頭に立って奮闘しているのが、阪神地域の図書館・史料保存機関職員有志による「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」です。NGO文化情報部と協力する形で5月に旗揚げした同ネットワークでは、被災地図書館への震災資料収集に関するアンケート調査や、自治体の図書館および災害対策職員を対象とした実務研修会の開催（7月）など、震災記録の保存に向けての活動に取り組んできています。

こうしたなかで、日本図書館協会から被災地各図書館宛の震災関連資料保存に関する要請が出され、神戸大学附属図書館や兵庫県立図書館が組織的な震災記録の収集・保存を開始するなどの動きも出てきています。

なおNGO文化情報部は、8月から震災記録情報センターに発展的に合流しています。

自治体の震災関連文書・資料の保存は？

一方、各自治体による、震災復興誌編さんの動きも具体化してきています。例えば、兵庫県では平成7～16年度の10年間をかけて、復興記録誌を編さんするという計画が公表されています。他の自治体でも、同様の計画が進行中です。

これらの編さん事業を進めるにあたって、何よりも重要なのは、歴史資料としての公文書保存の考え方に立った、網羅的な文書・資料の収集・保存です。文書館関係者や研究者の協力のもと、抜本的な対策が望まれます。

文化財・歴史資料の 災害対策に関する研究もスタート

一方、歴史資料・文化財救済活動の成果を生かした、史料・文化財の災害対策に関する研究が、各救援団体の手で開始されてきています。

文化庁ではこの間、「文化財の防災に関する調査研究協力者会議」を設置し、東京国立文化財研究所を中心とした総合研究を開始しています。また文化財修復保存学会（古文化財科学研究会が改称）は、7月から「文化財の防災を防災を考える」シリーズセミナーを開始、全国を巡回して第4回まで開催の予定です。10月には全国美術館会議によるシンポジウム「阪神大震災と美術館をめぐる」が開催、11月なかばの全史料協全国大会も、被災史料救済がメイン・テーマとなっています。

史料ネットでは、今後これら各種の機関・団体による研究活動とも連携しながら、独自にネットの活動をまとめ、さらに史料の保存と災害対策、被災地の歴史的特質の解明などに向けて、継続的な調査・研究をすすめていく予定です。

【歴史資料保全情報ネットワークの今後…】

震災による史料の消滅を防ごうと旗揚げした史料ネット。全国の皆さんからの募金をよって、史料救済活動を展開してきました。伊丹・神戸・宝塚等での広域的な巡回調査は10月で終了し、今後は連絡待ちなど情報をつかんでる家屋を対象とした救出と回収した史料の仮整理が中心となります。また被災地に於ける 歴史・文化遺産の保護を行政や市民に訴える活動として「第2回：歴史と文化をいかした街づくりシンポジウム」を、震災後一年たった1月28日に開催予定です。また歴史研究者を中心とした活動ですから、しっかり活動記録をまとめきちんとした総括報告を出す予定です。寄せられた募金は、総額は690万円で、現在残っている190万円はこれらの費用に充てる予定です（詳しい会計報告は後報で）。史料救済募金による史料ネットは来年3月をもってひとまず収束の予定です。以後は史料ネットの活動の中から萌芽してきた様々な活動や団体が発展的に継承してくれるでしょう。尚、史料ネットの活動に対するご意見や提案がありましたら、是非お寄せください。

お知らせコーナー

第2回市民講座

日時：1995年12月3日（日） 13:30～17:00（13:00開場）

会場：芦屋市立美術博物館（芦屋市伊勢町12-25）

阪神芦屋駅から徒歩15分又は阪急バス（芦屋浜営業所・新浜行き）中央公園前

講演者：長山 泰孝（帝塚山大学教授：古代史）「古代国家と震災」 下車すぐ

古川 久雄（六甲山麓調査会：考古学）「震災復興と埋蔵文化財」

コメンテーター：西谷地 晴美（神戸大学講師：中世自然史）

救出・巡回調査活動総括集会（ボランティア交流会）のお知らせ

日時：1995年12月17日（日） 14:00～

会場：尼崎市中小企業センター（総合文化センター向かい）

阪神尼崎駅から北へ徒歩5分（国道2号線沿い）

第2回 歴史と文化をいかす街づくりシンポジウム

日時：1996年1月28日（日） 13:00～17:00

会場：神戸市立博物館 地階講堂（神戸市中央区京町24番地）

JR・阪急・阪神三宮から南へ徒歩10分

内容：史料救済・埋蔵文化財・建築史・震災記録保存等から報告。市民を交えた討論。

*第1回シンポジウム記録集好評発売中。詳しくは日本史研究会へ。TEL.075-256-9211

『地域史研究』（尼崎市立地域研究史料館紀要） 第25巻第1号発行

「特集：阪神淡路大震災による歴史資料の被災と救済活動」（定価750円）

（主な内容） 小山仁示：被災史料救出活動の意義

奥村 弘：歴史資料保全情報ネットワークの活動

田良島哲：阪神淡路大震災文化財等救援事業について

坂本 勇：NGO文化情報部の救援活動6カ月（他6編 資料編付）

*詳しくは尼崎地域研究史料館へ TEL.06-482-5246

編集・発行 歴史資料保全情報ネットワーク

〒657 神戸市灘区六甲台1-1 神戸大学文学部内

TEL.078-881-1212（内線4070） FAX.078-803-0486

史料救済募金（郵便振替） 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009